

四月十二日に行われた北海道知事選は激戦の末、現職の高橋はるみ知事（六十一）が勝利した。道知事としては過去に例のない四期目。女性知事として全国最多選となる。ただ、道政の転換を訴えた新人の佐藤のりゆき氏（六十五）への支持が、知事の得票の七七%にも上る一四万六五七三票にも上った。この現実を踏まえれば今後四年間、道民の不満や批判を念頭に謙虚な行政運営が求められる。情性の道政を続けるなら「史上初」という記録は高橋道政の飾り文句に過ぎなくなる。

高橋知事は、これまで道民人気が高いことを政権安定や力の源泉としてきた。二〇〇三年の道知事選は二位の鉢呂吉雄氏との接戦を勝ち抜いたが、〇七年の再選、一年の三選は相手に大差をつけての圧勝だったこともあり、「自分のやっていることに間違いはない」との自信を持っただろう。自信が過ぎると、油断やおごりにつながる。道幹部が高橋知事の現状を「局長以下は職員の名前や顔を覚えようとしてもいない」と漏らすように、働く職員の気持ちや意見をすくい取ったり、士気を高めることに対しての関心が低いとの評判を耳にする。

道政の原点を見つめ直す

高橋知事にとって、四十九歳の初当選當時は幹部職員が年上ばかりで緊張感もあつたはずだが、現在はほとんどの部下が年下となった。いまの上層部は十二年前には課長や課長補佐、係長クラス。「知事が『自分が政策や経緯を一番知っている』と自負」（幹部）するほど、部下の意見を聞かなくなることもつながら。そうした姿勢が、道庁組織に伝播してしまつてはいないだろうか。

三月末に発覚した保健福祉部による一万八千人の個人情報紛失はシンボリックな例だ。障害者や生活保護に関する情報も含まれ、悪用が懸念されるのに、道庁は三週間にもわたって公表しなかった。道庁がなくなったのに気付いたのは知事選告示を控えた三月九日だったことから考えると「選挙が終わるまで幹部らが事実を隠しておこうとしたのではないかと疑われても仕方あるまい」。米国の社会学者マートンは、本来は合理的な管理・支配の制度として生み出されたはずの官僚制が、規則や命令に忠実であるうとするあまり、弊害（逆機能）を生むと指摘している。「権威主義」や「秘密主義」「尊大な態度」――官僚主義の陥穽にはまり込

みつがある、道庁の現状と重なる。国と市町村に挟まれた中二階的な存在の都道府県は、住民とじかに接して常に厳しい視線にさらされている市町村に比べて、生の声から遠く「お役所体質」に陥りやすい。現状の道庁について「情報発信に後ろ向き」「作成資料に間違いが目立つ」「政策立案能力が低下した」などとの指摘が目立ち、道幹部も「道庁は劣化した」とつぶやく。思い起こすと、堀達也前道政は、一九九五年に発覚した不正経理問題で窮地に陥り、道民の信頼回復に必死となった。道庁は道民の批判に敏感だったし、改革路線のアピールやメディア対応もオープンで積極的だった印象だ。

高橋知事は思わぬ苦戦を強いられたことで、道民の中に芽生えた視線の変化を感じているだろう。「批判を真摯に受け止める」という選挙後の言葉が空念仏にならないよう、知事と知事に仕える幹部以下は、常に自らの仕事と立ち振る舞いを自己点検せねばならない。それが「道民のために働く」道庁の原点を見つめ直す機会になる。

△聖▽